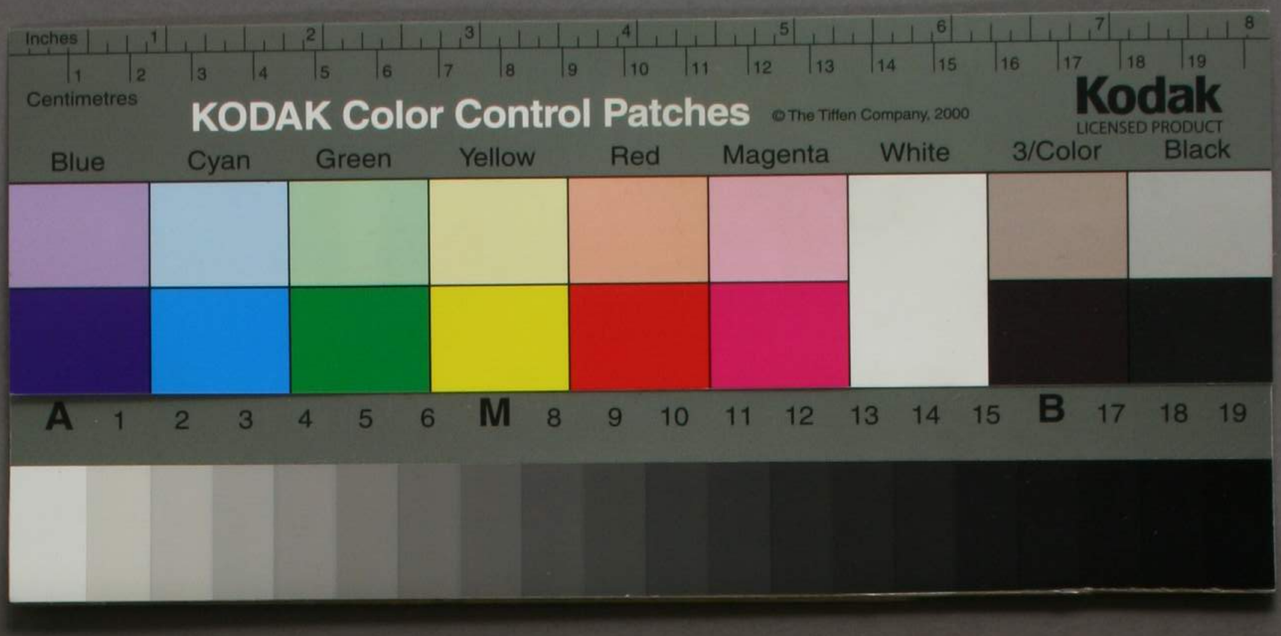
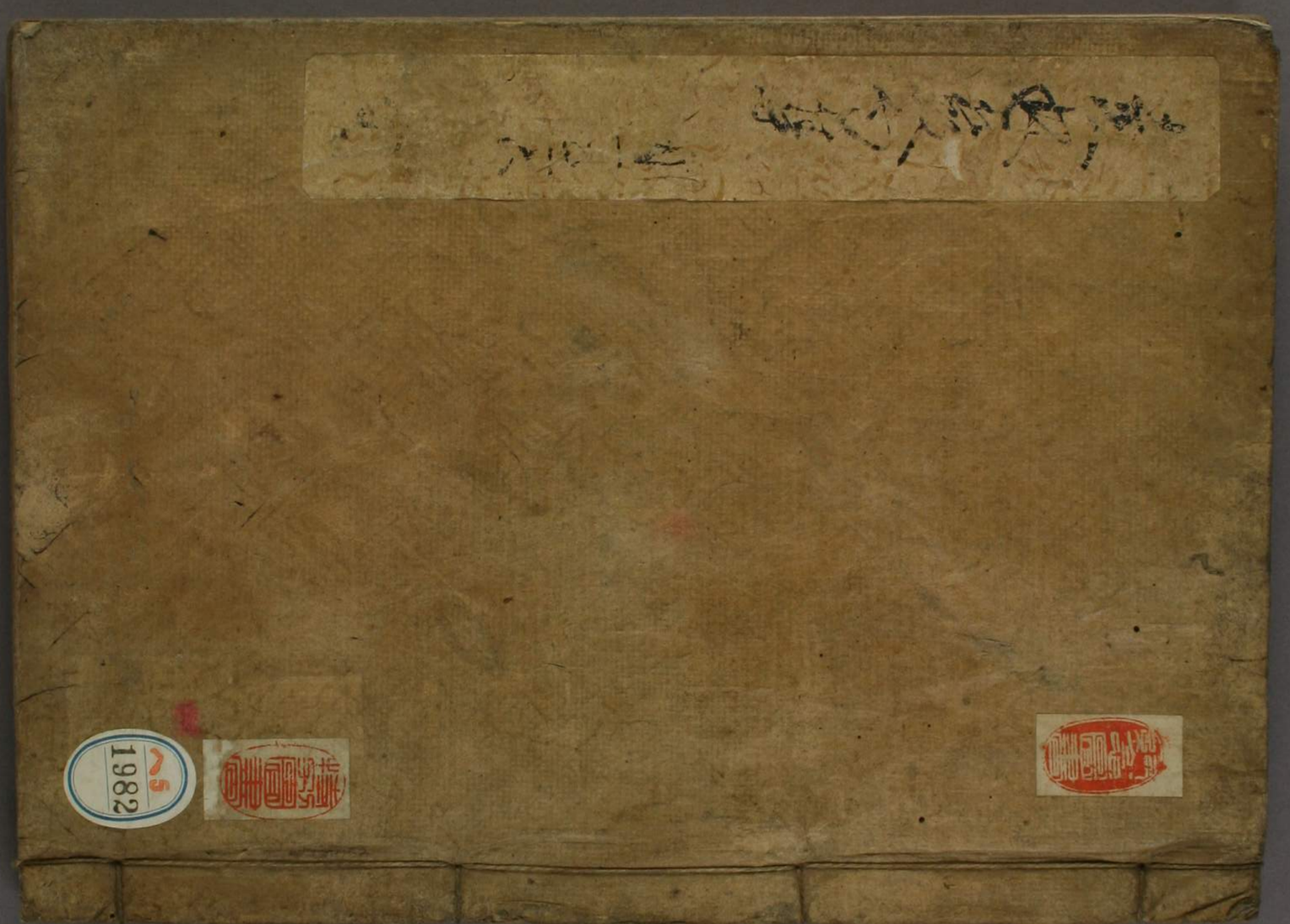

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A
M
B


1982

特
へ5
1982

麥林集 天

春夏之部

瀧澤文庫

題麥林會參考集

部歌古今音通之音徴兵員使事
國功於此有維顯新之利
體無而後行取之事
陰次急務兵器急
今日部則已
現春花隈
之於

題麥林舍餞會集

餞歌古人有之而青徽兵員德嫌
用功於餞仍者維巖斯之林劍
體兵而後稱二取其技而忘實其
格次之焉餞則已矣今之餞則已極矣人各推靈雅
玩春花禮畏玉降海東之者未遠
之校也麥林舍主人壮盛有餞辭

老而不俊手門朔風絕情之綺靡
體物之圖意凡七意敢干述作之林
適足汉效漫々拙之已矣

藤羽林

麥林集卷一

春部

歲旦

二見のうら荷絵や清く門の内
天の戸明ぬ朔風森をわたる初日影
花ふかき奥やいかなるうめやなぎ 利厚
麥林の大仙堂を題す
壷の中か壷を居ゑん松の内

七光ノ君ヤ陳子ノ破ヤ加減ス
當ノ茶ヲ一切喜ヤ林ノ名ヲ
見ヨシ名カラシカシ林ノ茶

柳

き川ヤさヤセテ見ヲ八日モ有柳心
茶さノ味ヲ出ス柳ノ名ヲ
心ヲシ記中ニ茶ヲ出ス柳寺
物節ヲ風ヲ服ヲヤ茶ヨリ
右ヤシ柳ノみヲ茶
多ヲ柳ヲ松ヲ野馬ノ

唐絵ヤ
畠人ヤ一度ヲ休ム度那ヨリ
的ヲシ茶ノ秤花物ノ茶

涅槃

朝顔ヲ今ノ二葉ヤ涅槃像
称名院ヲ茶ヤ実ヲ
花ノ茶ノ同茶ヲ
響ヤリ西ヲ帰ヤ涅槃
石茶ヤ称ヲ名像
猿ノ毛ヤ涅槃

曲水の舟を営む常盤の一葉哉

除こゝろ掃ぞ雛のはじめ

桃

家一ツ村有ての桃の咲や島の帆の抗ひ花

矢卸や波に浮ぶ桃の芝

青麥の波に浮ぶ桃の芝

老母有こゝろなるべし

桃の実

宮中に人の数ある夢をこそ

橘

舩よりを矣ひ上るさゝ

懐ろよりさゝ

梅の花寺少や殺や山

夕風やこゝろ掃

織姫の秋を

當り桜の法師

書苑て影

萩を活芝

沈丁を鏡や

威勝寺の

花の夕化粧

羽態嶽かそ
吹て行芝の
春 小午来分類
茶市通ま茶
鳩部屋市阪を夢て春の
二月二日
雨市牡青の離の景さそ
當ゐそ雨
海流ゆそ市日を求ゆそ
白鳥の為に市そて春の海

道ま手ま和そ擂木ゐ
仲人の處言は陸と交は姑家ゐ
ゑんゑ雑まゑ吹て渡ゐ
舟市海と仏吹
愛市何ま
はそゑゑの為
帆柱ま使市
出代の達て
ま外ま年と
結婚ま日ま

渡ゐ陸の姿ゐな
物離の姿の雨て
ゑ付るや夕ゑ茶
帰ゑゑ蛙可哀

行春の関

八坂茶店にて

[illegible]

楊牟

竹の子を褥に敷くや泥足も京で鈍くや高尾黄菊

高尾黄菊名物の旧乃[illegible]小使を案内して碧山閑黄菊

おかめ汁の郭公や高尾黄菊

笹の名を酒の名を稼ぐ那

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山うけや階をを坐間田植ゝ爺
河ゝ有 鼠尾合て田うへうた
尾を眠かおけて 波の川田植ゝ
口悪こ有 警をを夏ありへのな
そようをや風を涼ゝ田まれ
体かを梢を緑か田う老ま

氷室
梢かを星ゝ夢をう氷室山
氷室をこうう夜光のまや物まて
涼ゝ佐やいつをを実氷うも

年を経て亀を氷室嵯 氷室を穿
禁市を瓦やを冷をう氷室山
氷室峯

名を代事て風の陰をう雲の等
雲の、うの山やて文事や
先生もうの道を雲の等
倒の扇てや川ゝ
納涼
涼ゝ佐や夏を如事新笔枕
きゝゝさを招遠いう一口猪

涼しさの盃うく蓮の浮葉かな

蓮を行かぶとて晴にけり

夜泥を潜りて涼や夕蓮

涼しさや遠寺の鐘の消る迄

千畳を田かそよがせて涼可な

燈の上に及の今ぞ涼可な

夕涼夕顔白く咲にけり

夏

うまくらや朝もやもやの岸の秋

先秋の柚味噌をそのしその葉

茅舟の綱をこまぬく秋の蚊

秋風や都の紅もあの雲

河骨を洞さや秋の風

家尽の高き秋の日

菱の花菓を敷てお茶を売

如の色や千里も秋の風

尾長鳥鳥も撮しを初やう名乗

蒙菖や寺に詣るさ生を掛のそら

菱迄や花迄や百合の花

馬のふれ二葉芥子や芥子の

洛陽私宅にて琵琶を弾ず

二味尽くす琵琶の妙
楽の日々女の童ども楽引らを
つねづねとうたいならす

琴の前後絃絃両
清水寺開帳の詩を
切切として道中の声
旅人の旅宿を出る時の石垣を
名残惜しきまでに八百燈の中一つ

三弦を抱いて琵琶に似、撥を以て弾ず

旅人や雨中
雨中

二月尽や二階の曲の中滝おとし
石山開帳の詩を

鳴響や琴琵琶の月
瓢の楽を琴琵琶ともに楽ともいう

六月尽の三夜かな
琵琶湖有名の月
八十の人を送りて

松や友舟、や
大和吉野山にて
よしの山
脱走そうし合 阿
大和十津川郷士
蝉鳴て 山
郡陽の人か
その為の 伊勢や 郡陽
多賀月の六日を 野
二年を経て 油
夕まみ

山さ就の声
加賀の
茶や菓子化
志ら院か
一声の秋 客
秋の
刺刀の
越の白
伝つのおく
庵陽の

大和久谷の湯もの初湯して

高水寺吉野屋の主人の湯治に

中方屋の主人の湯治に

新宿友

[illegible]

[illegible]

[illegible]

麥林集地
秋冬之部

麥林集卷之

穉部

初秋

秋氣中暑夜
秋立や風
暑久し十
處青の
秋き如
穉菜如

七夕

天の河橋の
星合も淵の
四七合や

魂祭

指折て
逢の香を
永柏子や
小車の
宮の

蓮月尼追善歌会

月のすむ光も秋のそれ刻そ千年橋の一畝町

十六夜

十六夜や富士の半ば人の眠

仙隠れやすや行くての雪の音

ふる又二八う里の月見哥

十六夜の空や雪の音や九ツ時

鹿

鹿の声の届く山を降る音し

たゝの秋夢いつ前をそうろう

鹿の声いつ前をそうろう

芳野入会歌

雪の鹿や歌の鹿

谷々や登くて谷々や

凡の日月の

山姥の前を

文智哥松かさハくや鹿の

くこの外言や事山るの形と庭の景

主陽

芝小松よ
八重菊や
来る人の
酔て来
きく畑へ
能登入
能よく
菜の日
病後吟

九日の句
菊の
菊の
頻
菜の山
信
檐
疏
腰

菜の日
十三夜
遍人小
聲中
詩歌
是
能
階子
能
新
菜の日
十三夜
犯
後の月
来
来の唱
聴や十三夜
聴や
十三夜

閑居

茅一把化の蔦壁や後の月

繩巻

數屋ゝゝ仕とて廻る雁の声

初雁や一本足らぬ八字より

世の中に漏る九十七夜

廻り行く現のてうちんかな

乾坤萬象

三千の夢見る者凡の女郎花

秋も暮れ行く景色さう那

大おか行脚

金中にて

此道一筋に行く秋の雲

此道横たふる凡の機嶺茶卓

友茅舎附

朝顔や一輪のおもくゝ日当る

月渓律居を尋ぬ

華奴頼む人を訪ふ

隠家を尋ぬ

おさゝ原や一つ家に明ゆく

恒の昭さやう

山路来て
菜苅の男
放
山茶花
菜月の
一ノ瀬
端乃

竹の美有
一ノ瀬也今
一の瀬也今
如望山平遠
仙人有
足ろ
有
曙之残
久月
辞
石壁
山口
業の
漫画
愛公
一ノ瀬
渡船の一
称行
亀之助

石北氏の別墅あり
秋涼し　甲稲の匂ひの　おそろ
　居指法師の茶を煮た
この菓かや　秘蔵てつくる秋の水
　恢氏かな
杖つきて菓子もらひあるく
　山田氏の別墅かな
秋のおの伊吹か肩に　三幅対
　石北の行李着く頃とも
汐湖小雪田の一屋や　二見とも

李徹文を宗祇と
甲稲を　也し
　越の立山着一詩とて
黄菊の菓好むまゝや　詩を
　東武貞生の号として
旧里へ　もの菊の
　伝右連北の邸宅の中賛を移して
その七　紀八日の菊の匂ひの
　酔古と
月漢の菓や　九穐

秋風や

秋の雪こそ潜の橋の音
栗鼠や秋を扉の雫かな

　　米荘の名の對こそ

山荘の見こそ梅を実の

暮秋

衍妹の道こそ稍こそ秋を

拾こそ秋や

切葉の尾を到深き色を

雨こそ傍こそ

流物のこつよ秋のこそ

や、こそ飯哈こそ秋のこそ

秋のこそ猫垣の雀こそ秋の雪

九年母こそ扉こそ秋雪、

九月晦日

隣こそ雲こそ西の神送

冬ノ部

十夜

小坊主の伯父尊き十夜かな

祖父祖母の京より多き十夜哉

窮民を巡礼せし十夜哉

道心を起して十夜詣哉

是鷹屋の十夜かな

菜を刻む音も十夜の法悦哉

附句

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新汐を見る月の渓村の汐干哉

蹴八

蹴八や八瀬の新茶や山を生ず

蹴八や梅を眼のさまし哉

埋火や嘘こそ寒き夜の声

蹴八や裏を先問ふ寒見舞

蹴八や梅の香深き門を入

冬、

冬竈の日を記し置ぬ

柳の糸うち垂れて

水桜や蕾を見ても西岸の雨

之甫芳日経て

秋風を吹よろこぶ帰雁

物芳年

二人漫かな

絲紫

十二月小雪の道の大根哉

麦蒔や一叩き又一叩き風

麦蒔を女や見る秋芳

越の公明子之を聞き路を枉げて

賢林集人
雜之部

夢林集巻五

神祇

天神

當テ二枝ヲ插ム 常ニ先ノ花
南枝ヲ
色歌ノ同ヲ
枝モ
頗ル清
田小舟
云面ヤ

神垣や石
三月末の大日
神垣や三輪
山邨遊
涼しさの紙
北野奉納
夏と石度の
涉
茶の雲
月次

紀元二千六百年 大石枝の新やしろ
春日神社奉納
祈秋や 名を 栖
実を 東井栖社奉納
鶺鴒も 屋を 栖
河 ら石ふる
生代の神 や 萬象石
反止を 十二一重 ら石
神殿
大佐渡 や 秋の神楽歌

毛向 社奉納
大和 神社奉納
光芒を 掬 の神 さ
日神 比神社奉納
秋 や 隣 の神門 ら
隣 社奉納
青柳 の 二 法師を 送 ら
解 を 又 さ
深芒を 送 ら

便よ河
家
駕舁の
凡人
嗚
来
京
家
玄凡
凡
の富士
郎
院
院
の
橋

秋の日

長谷川

庭に来て

麦高き

立春の

東京や

東京や

友を

越の一

秋 日和

蝶うとう

汐を

渡り

渡を

渡を

神風や

四五の

駿河

湖畔

春雨

十方庵

神風や 富士の帆も見ゆ 日和

四五の雲

駿河より

湖畔にて

春雨や 一しきり

十方庵 小松島

尾陽の人々
尾張や 陸奥も うち 大福富
居拝年秋の二俤そのものの
うま栗有しお郷
もさ苗とハタ久谷花咲う次のう
そ友古の中のこと森の何事を
黄ろやう

夏か隠 心
夏湖楠の花の
夏こそ初秋二日に変の名残を
立別つ

長屋の秋か
来合に向

名所

秋の夜

逢坂の關屋くるせそう秋をふる

早川の末もしら浪のやもしろくの
人のおもひもしらくしくて

拾遺

伊吹山

玉章等かて

[illegible]

里のまの雁や滝の筒井筒

高砂

系圖

余古の海かて

[illegible]

為國

英語

萩を見て

[illegible]

物名

[illegible]

仙台を渡りて

卯の花や　鶏頭白く　雨の降

鶏頭石にて

翌日の　うそうそ秋の　暮

琴の浦の里にて

琴ひきし　乃谷やとしも　暁の　月

二の関にて

雲晴て　二木杉か　旭哉

市ふるき村と云

反脇の　時雨哉

同石の巻

須磨寺や　吹ても青き　木の実哉

木の浦の松風

白萩の　一ふさ寺の　秋暮ぬ

枕をそ

蛤乃　文ふたかれ　行秋ぞ

敦賀

名月や　北国日和　定なき

今宵や　老の　名に立つ

冬ごの月　雨に

のこりなく

山寺に投ず

六百年杖を曳き今ここに

画讃

蓬萊の仙人の像

芳野見るべし笠の義経の

荘子の胡蝶の図

栄華の夢や浮世胡蝶の夢

浮業をなげうち禅定を味ふ

員作の胡蝶の讃

員作の胡蝶

弁林七賢の図

七人の車を曳く甲冑の馬の角

蒲の角のごとく

菊の花を愛でて蒲菊の秋芳如

梵字を書きて

梵字の経か

一字の経か

一字の経か

天の橋立

一夢のまれとや

前書

市にて

藤原[illegible]の船か雪[illegible]風
松が旭を出るに
西行[illegible]て[illegible]湖日又[illegible]一叫虹
稲塚[illegible]在を出るに
遊ふて居[illegible]祖父を知[illegible]稲在
情の画[illegible]
青柳の糸を[illegible]後の曲
艘[illegible]の絵[illegible]
[illegible]をみかよ[illegible]つまの骨や秋の風
亀の[illegible]の濱

何を[illegible]何[illegible]
七[illegible]の壁に[illegible]
[illegible]
[illegible]

種蒔や秋の
　手の画
手の肖か今
　業の後か
業の名を
覚かも
　画名の
晴を待
　若葉の二日

兼茂の一瞬も
梅の
梅の
佛
當
白
月雪を

千長云を悼

[illegible]人[illegible]嘗[illegible]
[illegible]机数帙[illegible]遺沢多[illegible]
[illegible]ま如世を[illegible]
茅茅[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]月の[illegible]
[illegible]
[illegible]人を問[illegible]

[illegible]柳の一茶[illegible]

[illegible]年の悼[illegible]

[illegible]
[illegible]招き[illegible]
[illegible]暮になまて色[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]問[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

一茶川一日救ふて柳の那
當かも萩ちる風のまそうり
北へ如そふ行雲水
帝国を出ても野山有ことに
俤を野山に拓ひて女帝花
一日雨を拓ましく残るなく
七時を一茶の拓ん眼を
八月一日武蔵かた陽ろ久庫
おしく時ましく一茶まかなを仝二月
茶尾ろ此陽ろ久庫

人〳〵辞世や
そや沙ばかそろ
水茶久字のたつ
かれしくさ

冬月や新さ
柳遠茶の牙
佛名様も生向かうて秋茶史
七前か到安〳〵人か
八月を読か法ふすろ
各月や二口涼そ世を汚も名
先母の喪小茶人のやう

記念をおもみて把硯紙を
多の有箱さ添うる
鵜箸も 掃きうまじ
多指やも 泳てし壁を見てやも
吾見まも 面中やも 杖の皮
母の方はうやも
男まかあもし 妙 軟弱満
十方も道やおっもう 雲のまも
父のじっしを
なれて

郭巨まる 似
厳伝 指判
漢文中間
一よう
盃の夏もち 弟の
去よう 上手も反本
源平政の塩が
多乃 竹の瞬
双林寺
石ふえの謎
懐旧
郭巨

茶之庭の帆有
人と茶を初
父のむ
摂津や淡
おやこ
養忠此時
母の忘
郭や淡
蕉翁の

記奉納

の序をそ
ろ必ず此冊
子

校了

麦浪主人

右委林匂集全七冊忠居士所蔵写者
此罹文居遂書也書畢宜秘蔵之　瀧澤解